［特集］やっぱり薪窯！

詳報！ 増穂登り窯で見た薪窯焼成の感動リポート

『陶遊』復刊1周年記念スペシャルイベント

1000円で薪窯焼成

去る4月19日から4月29日まで山梨県「増穂登り窯」にて、『陶遊』復刊1周年記念スペシャルイベント「1000円で薪窯焼成」がおこなわれた。備前や信楽、唐津、越前、南蛮などの耐火度の異なる土を同時に一つの窯で焼いた今回の企画。使用したのは「地下式穴窯」。窯詰めから窯出しまでの一端と、同イベントに参加した方たちの焼成作品を紹介する。

増穂登り窯からの眺望。南アルプスのパノラマと満開の桃の花が出迎えてくれた。

〈薪窯焼成 スケジュール〉

■搬入締切：4/8（火）必着
■窯詰め　：4/19（土）10時～
■窯焚き　：4/19（土）～4/23（水）
※5日間焚きます。
開始：4/19（土）20時～
終了：4/23（水）夕方予定
■徐冷時間：4/24（木）～4/28（月）
※5日間冷まします。
■窯出し　：4/29（火・祝）10時～

『陶遊』復刊1周年記念「1000円で薪窯焼成」の企画が持ち上がったのは昨夏の頃だった。増穂登り窯の太田代表から低迷する陶芸を業界全体で盛り上げようと、メディアからは読者参加型イベントをすすめられ、今回の薪窯焼成イベントの協力をしていただくこととなった。

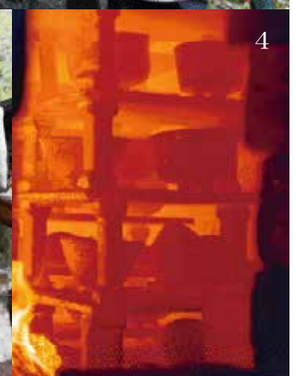
参加者の呼びかけは、昨年10月23日に発売された『陶遊139号』から約半年かけて3号分に掲載し、今年3月16日に申し込みを締め切った。募集点数は250個までとしたものの、集まった点数は予定より少ない100個前後に留まった。しかし後日、太田代表から思いがけないサプライズ情報が飛び込んだ。

今回の薪窯焼成には、『陶遊』の参加者以外に、人間国宝・故三浦小平氏の未完の遺作、壺2点と水指2点の計4点を同時焼成するというものだった。

太田代表の話では、「8年間、未完のまま自宅に眠っていた作品で、三浦先生の奥様から直々に連絡をいただき、増穂で焼いてほしいと依頼されたものです」というもの。その他、今年7月8日に富士川町にオープン予定の「道の駅」に展示する地元企業の名が彫られた陶板と、増穂登り窯会員たちの作品180点も同時に焼かれることとなった。

「三浦先生の作品と一緒に焼かれることなんて一生ないこと。私も緊張しますが、この窯で一緒に焼かれる皆さんの作品が、思い出深い作品になっていただけるとうれしいです」と太田代表は話した。

そして、4月下旬。増穂登り窯は満開の桜の下で、『陶遊』復刊1周年記念「1000円で薪窯焼成」をスタートさせた。人間国宝・故三浦小平二の遺作とともに。



1. 増穂登り窯のロッジ。2. 4月中旬、若葉が芽吹く萌黄色と山桜の薄桃色で染まる櫛形山。3. 窯出し後、ロッジ前で花見酒。4. ねらし焚き。この温度で2時間還元でキープする。5. 食器など小品の窯出しはサンテナにまとめて出す。6. 今回の『陶遊』薪窯焼成イベントの参加者たちの作品。

7. 窯出し後は皆んなで桜鍋を囲む。
8. 窯出しの参加者たち。皆さんお疲れ様でした。

窯詰め時は、素地土や釉薬の種類をチェックする

増穂登り窯の北側斜面にある「地下式穴窯」。登り窯よりもゆっくり温度が下がる。近くには川が流れる関係で、湿度が高く、火色が現れやすい。

今回の薪窯焼成イベントで使われる窯は「地下式穴窯」。8基ある増穂登り窯の中で比較的クセの少ない安定した窯だ。容積は約2・835㎥。茶碗でいうと約500個分が入る。この地下式穴窯で焼くことにした理由を太田代表はこう述べた。

「今回の焼成の主役は『陶遊』の薪窯焼成イベントに参加した方々の応募作品である抹茶茶碗やぐい呑、湯呑です。薪窯焼成が初体験の方もいるでしょう。それらを考えると、安定したこの地下式穴窯が適していると判断しました」

今回の薪窯焼成スケジュールは9ページで紹介した通り。ただし、冒頭でも紹介したように窯詰めされる作品は4グループに分かれる。

火入れは4月19日の夕方スタートを予定していたので、15日頃から窯詰めの準備は始めた。

この地下式穴窯は、焚き口から最奥まで約3m50㎝。入口は焚き口の一箇所だけなので、正面から作品を入れていくのにかなり手間取る。

窯詰め時に敷いた座布団がびっしょり。2月に降った豪雪のせいで、窯内全体にかなり湿気が残っていた。

名前入りの陶板に透明釉を吹き付ける。7/8富士川町にオープンする「道の駅」に展示される予定。

作品を1点ずつチェックする太田代表。土の種類をチェックし、窯詰め位置を決定する。

サンテナに移し替えられた『陶遊』薪窯焼成イベント参加者たちの作品。これからいよいよ窯詰め。

故三浦小平二氏の壺（右）と水指（左）。レリーフが剥がれないよう、霧吹きで透明釉を吹き付けた。

温度計は、窯の中央と奥の二箇所に設置した。焼成中の温度差は50～100℃で、この差は陶土の種類と炎の流れ、棚板の組み方、棚板の使用枚数で決定する。ちなみに今回は棚板84枚を使用した。

作品の素地土や釉薬の種類をチェックし、ここで窯詰めする位置を決める。

次は、いよいよ窯詰めだ。まずは最奥から詰めていく。最奥は窯内で最も温度が低い場所。そのため耐火度の低い土が適している。

「三浦先生の作品は使用された土の詳細が分からないため、安全性を重視して、この位置に窯詰めしました」

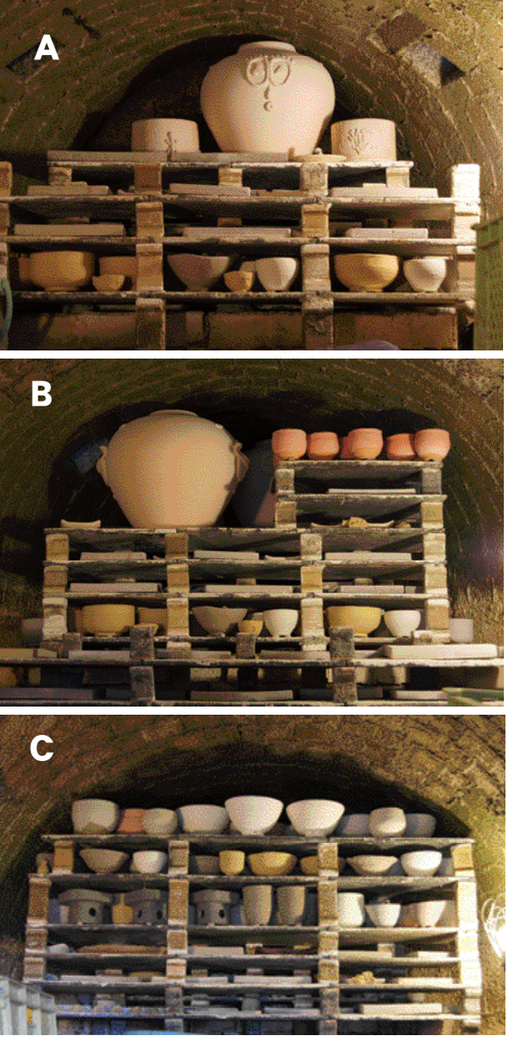
次は備前の田土、唐津などの赤土が中心の作品で、中間には信楽の赤土や志野などの施釉ものの食器類を窯詰めした。

続いて、中央から火前部分には、今回の『陶遊』薪窯焼成イベントの参加者たちの作品を詰めた。素地は基本的にすべて素焼きしたもので、備前の山土や越前土、近江土、古陶土、穴窯用火色土、唐津土、信楽赤土など、薪窯に適した陶土が多かったが、一部南蛮土などの耐火度の低い土や生素地もあった。そういった土は火前の棚板でも、作品の後ろに窯詰めした。施釉作品は藁灰釉、黄瀬戸釉、志野釉、松灰釉などが多かったが、ほとんどの作品が火前の棚板でも良いと判断し、そこに並べた。

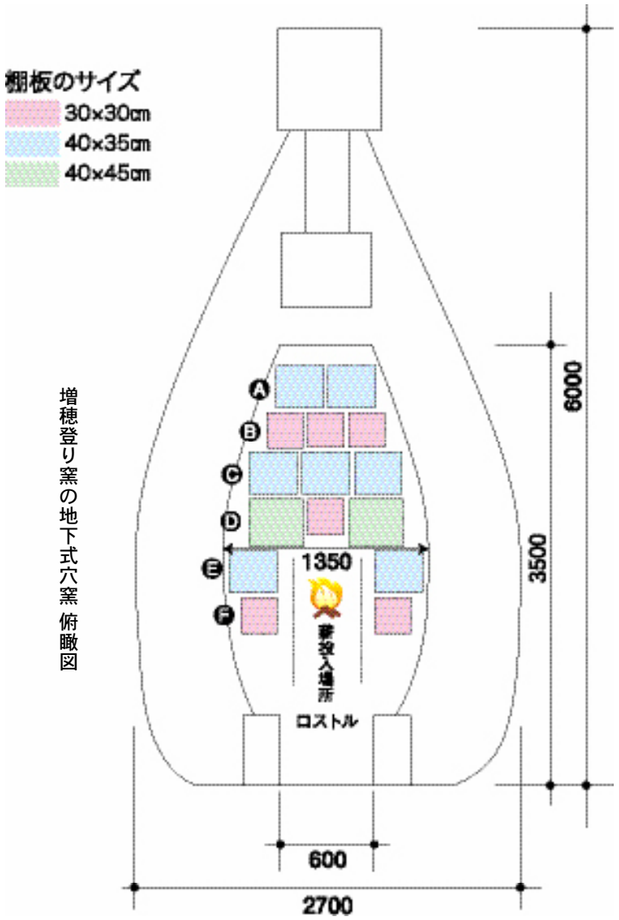
棚板は薪の投入スペースを中心に、左右各3枚と正面の1枚、合計7枚分が火前となる計算で準備し、約100点の抹茶茶碗やぐい呑、湯呑を窯詰めした。正面決定後、ほとんどの作品に高台の裏に道具土3点で留める「目立て」を施し、棚板上にセットした。

窯に温度計を設置。左／窯奥。右／窯前。

目立て（道具土）は、高台のやや内側に3点で立つように付ける。



焼成前の窯内の様子。最奥のAには故三浦小平二氏の壺と水指を配置。



増穂登り窯の地下式穴窯 俯瞰図

光沢面とマット調が共存する器

4月19日、夕方からいよいよ火入れ、焼成がスタートした。だが、今年2月半ばに降った豪雪（積雪量1m50㎝）のせいで穴窯には湿気がたっぷり。正面を全開したまま約30時間、200～300℃で水分を飛ばす作業に苦労した。

33時間で450℃以上に到達したので、ここで正面を閉め、焚き口を作った。薪も水分を含んでいたが、ここで窯内の水分を断たないと灰の小さな粒が完全に溶けないまま作品の上に付着する「メロン肌」になってしまうため、その後3時間で100℃ずつ昇温、還元炎でゆっくり上昇させた。

58時間で1180℃となるが、中央と奥の温度計の差が約100℃。80時間で中央が1220～1240℃、奥が1140～1160℃。10時間キープ後、93時間目で中央が1080℃、奥が1070℃で還元炎のまま終了した。

4月23日12時、最終色見本チェック。13時窯焚き終了。最後の10時間キープが、作品の肌合いをしっとりとしたマット調に焼き上げる。

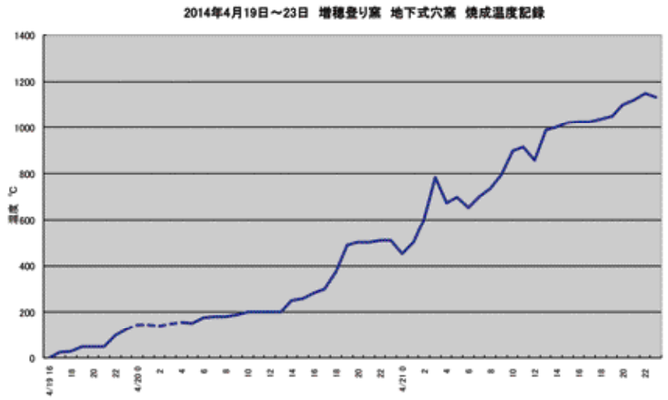
今回の薪窯焼成イベントの参加者の作品、とくに抹茶茶碗には、光沢面とマット調が共存した肌合いの作品がある。じつは、その肌合いを求めて、意図的に狙ってそのような焼き方をしてみたのだ。これは上述にある還元炎のまま終了後、還元炎から中性炎の間を5～10時間かけて引っ張りながら徐冷することによって現れる現象である。

4月29日10時、いよいよ窯出し開始。広場には、窯出し前に作品を並べるための板が敷かれる。板上には、窯内の作品の配置とまったく同様に配される。これは窯出しが完全に終了した後で、窯内のどの位置に置いたものがどんな焼き上がりになっているかの確認が容易になり、反省会の参考になるからである。

もちろん、同じ窯であっても一回の窯焚きごとに微妙に異なるといわれる薪窯とはいえ、今後の地下式窯焼成のためのデータをとるためである。

窯内の棚板配置図ABC…の順に慎重に窯出しが始まる。焼成に参加した方々は、それぞれに窯内を覗き込み、自らの作品が現われるとその焼き上がり具合に一喜一憂する。

大小あわせて350点を越す作品のなかで割れた作品はなかったのだから、今回の窯焚きは大成功だったといえる。



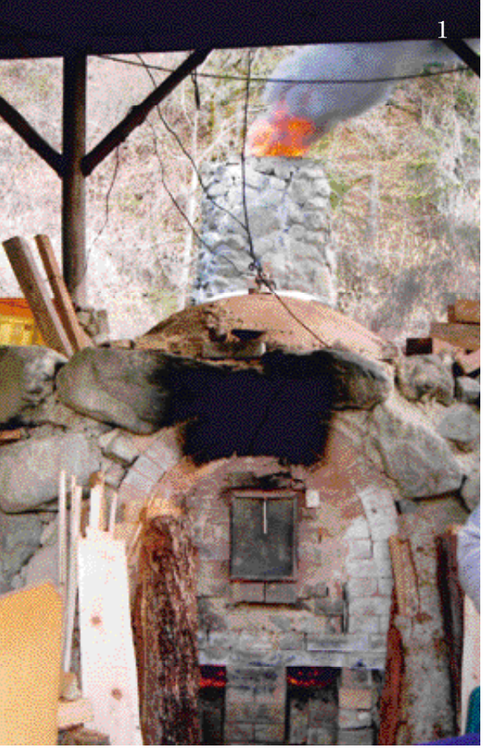
上／お供えには富士川町の地酒「春米」を。限定2000本の貴重な地酒。右上、右／氷室神社の参道に位置する増穂登り窯。窯詰め後、神様にお酒と米と季節がら山菜を添えてお供えする。

火入れ。最初は新聞紙を使う。

今回の焼成で使用した薪は、全部で小割5600本、切端700kg。

窯の温度計。左が窯前1210℃。右が窯奥1142℃。

全開にして窯中の水分を蒸発させる。窯内をチェックし、作品が倒れているところは直す。ただしタイミングが重要。

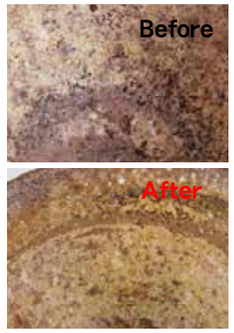


1. 火入れから4日めの朝。2. 正面から色見本を取り出す。3. 色見本。左が火前。右が火後。　4. 4日目の昼。窯の右側は『陶遊』薪窯焼成イベント参加者たちの作品が並ぶ。5. 正面焚き口から見た窯内の様子（4月29日にて）。6. 窯の最奥に窯詰めた故三浦小平二氏の壺と水指。

薪窯焼成作品を使えるようにするまで

薪窯焼成した作品は、窯出し後にすぐに使うことができない。なぜならば、赤松などの灰が作品の表面に残るので、窯出し後はいったん水洗いし、グラインダーやリューターで荒削りし、砥石と耐水性ペーパー（400～800メッシュ）でザラついた面をこすりながら仕上げる必要がある。だが、こすり過ぎると灰が落ちて色も薄くなってしまうことがあるので、注意しながら自分好みの肌合いに仕上げていただきたい。また薪窯作品は窯出し後から数ヶ月後、1年後と徐々に肌の色が落ち着いて濃い火色に変化してくる不思議さがある。食器類が変化するのは当然だが、オブジェなどの装飾品まで変化するので、参加者の方々はこの点も留意して実感してほしい。

目立て（道具土）が高台に付着



灰が熔けきらずにザラザラしている

薪窯作品の仕上げ「砥石がけ」

① 耐水ペーパーは目の粗いものから仕上げ用の細かいものまで、2、3種用意しておくとよい。砥石も同様。

② 作品全体が浸るまで水を入れ、しばらく付け置きする。

③ 布を敷いた上に作品を載せる。砥石を水に濡らしてから、目立てが付いた部分だけをピンポイントで擦る。力を入れ過ぎずやさしく擦る。

④ いったん水の中に入れ、汚れを流してから手で触れて確認する。汚れが付いたまま擦ると汚れでキズが付くことがあるので水で必ず洗い、汚れを取る。

⑤ 器内や口縁は耐水ペーパーの方が擦りやすい。

⑤ 時々、手で触って凹凸面が残っていないかを確かめる。擦り過ぎるとせっかくの灰が薄くなってしまうので、加減しながら自分好みに仕上げる。

今回の焼き上がりと参加者たちの作品について、太田代表に品評を兼ねてお話を伺った。

太田 参加作品で圧倒的に多かったのが茶碗でしたが、気になったのが重さです。茶碗の適した重さは400g前後くらいですが、重いものは700～800gもあり、また厚みもありました。次回作る時は、玉造りで1個の粘土の重さを決めて作るとよいと思います。また白化粧や釉薬ものが数点ありましたが、全体的に薄く感じました。薪窯焼成の時は、通常の厚さでは剥がれてしまう恐れがあるので、やや厚掛けにするとちょうどよいでしょう。そして、もっとも気になったのが土の選択です。備前や唐津、越前と焼締に合う土を皆さん選択されていたようですが、薪窯焼成は通常よりも長時間焼くことになりますので、電気窯焼成時と同じ土ではへたったり亀裂が入る場合があります。薪窯焼成の場合、信楽の白土系を10～20％混ぜたり、普段の成形時よりやや厚めに作るとへたらないと思います。

薪窯焼成は焼成グラフを見て、その上昇ラインに合った土で、合った場所に窯詰めすることで初めて気に入った作品を焼くことができます。つまり、自然の摂理に合った焼き方をすることが重要です。

現在はそれを無視し、一方的に「この土は1250℃で。これは1230℃で釉薬を掛ければ、こういう風に焼けるはず」と人間の思い通りにコントロールするのが今の陶芸の多くです。

今回の陶遊の参加者の多くが、この地下式穴窯で焼くのは初めてだったと思います。感想の中に想像した焼き上がりではなく、残念だったという方がいましたが、窯の特性や、まして焼成グラフもわからない中で満足いく作品を焼くことは奇跡に近いことです。電気窯焼成で慣れてきた人が、同じ土で薪窯で焼いても思い描くような作品になるのはかなり難しいです。

今回の薪窯体験を参考にして、次回のチャンスにつなげてください。窯に合った土を選び、窯詰めにあった場所に置けば、今回よりも一歩進歩した作品が焼けるはずです。そのときは、窯の神様もきっとあなたの作品に寄り添ってくれるはずです。

窯詰めの位置に倣って並べる。手前が火前、最後列が火後。

薪窯で大変なのが焼成後の棚板の掃除。天然灰が垂れるなどして表面が汚れるため、使用後はヘラやグラインダーで削り取り（写真左）、表面をきれいに掃除する。その後アルミナコーティ剤を塗って（写真右）、作品が付かないようメンテナンスしておく。アルミナコーティング剤は水で3倍くらいに薄めてサラサラな状態にしてから、刷毛で薄く塗り伸ばす。

薪窯焼成イベント参加者　焼成作品

小林一雄　69歳（埼玉県）
抹茶茶碗　口径12.5×高さ8.5cm（古信楽土）
［感想］抹茶茶碗２個、焼成参加しました。焼き上がりはなかなか本に載っているような景色にはなっていませんでしたが、出来栄えはまずまずでした。今回のようなイベントがあると作陶意欲が湧きます。次回もイベントがありましたら、参加します。

早川綾香　31歳（埼玉県）
抹茶茶碗　口径15×高さ15cm（軽量石はぜ土）
［感想］初めての薪窯体験でした。焼き上がりの素晴らしさに感動しました。今回は残念ながら窯詰め、窯出しに参加できませんでしたが、また機会がありましたら火で焼かれる様子を体験させていただきたいと思います。

柴崎孝雄　71歳（千葉県）
抹茶茶碗　口径15×高さ15cm（穴窯用灰かぶり土）
［感想］申し込みは抹茶茶碗３個。いずれも火色の付かない白い部分（土肌のまま）とビードロもなかったのが少し不満です。窯詰めが不参加だったので、位置を決められず止む得ないですが、見込みなど３点とも力強く炎の勢いを感じさせるもので満足感はあります。予告にあったように「秋の塩釉焼成」ぜひ実現してください。今から準備しておきます。次回は６個までお願いします。

井上孝之　50歳　（京都府）
ぐい呑 口径6×高さ7cm　使用土：赤土、萩土
［感想］ぐい呑2個を申し込みました。思った以上の焼き上がりに満足しています。

横溝智子　56歳（埼玉県）
抹茶茶碗　口径12×高さ9cm（穴窯用もぐさ土）
［感想］想像以上の味わい深さと個性ある表情で、念願だった人生初の薪窯焼成作品に大満足しております。我が家の宝物です。本来なら窯詰め、窯出しの体験をするのが理想でしたが、遠くにいてもこのように参加できたこと嬉しく思います。ありがとうございました。

南　眞弓　64歳（埼玉県）
湯呑　口径7×高さ6.5cm
［感想］地元の公民館の陶芸サークルに入って約10年になります。普段は電気窯なので、薪窯焼成は憧れでした。今回のイベント記事を見て薪窯に初挑戦しましたが、参加してよかったです。焼き上がりにはとても満足しています。次回もあれば参加したいです。

橋本佳美　（東京都）
ぐい呑　左）口径8×高さ4.5cm　右）口径7.5×高さ5cm（備前土）